

紛争後複合民族社会における言語の諸相： ボスニア・ヘルツェゴビナにおけるグローバリゼーション

国際学部 生田 祐子
(国際ボランティア委員会委員)

はじめに

すべての紛争はコミュニケーションに起因すると言っても過言ではない。世界中の民族対立は、その背景に自らの宗教、言語、経済、政治、文化の優位性を望む人間の根源的な性質があり、ある時その矛先がコミュニケーションの表層に現れ、双方に相手を攻撃するきっかけを生み出すことになる。筆者は、長年日本での英語教育の現場に携わりながら、授業の中で、言語と平和構築の問題を学習テーマとして取りあげ、途上国への学生ボランティア活動にも過去3年間同行し、途上国や紛争後復興地の言語教育の問題と英語の役割を研究の対象としている。紛争後の傷を負う人々の厳しい状況を見聞きするにつれ、外国の研究者が簡単に言語教育の提言をするべきではないと考えながら、「言語政策」と「言語教育政策」への取組みが、紛争で破壊された社会基盤を復興していくために、大きな鍵を握っていると考える。この一稿では、ボスニア・ヘルツェゴビナにおける復興の過程と言語の諸相に焦点をあて、紛争後複合民族社会をグローバリゼーション（国際化）の観点から考察する。

1. 多民族・多言語社会のボスニア・ヘルツェゴビナ

世界中の多民族と紛争問題を考える上で、多民族連邦国家であった旧ユーゴスラビア地域は、民族、宗教、政治、経済に至るまで多くの要素をかかえているため、研究対象の地域としては多方面から注目される。しかし言語の問題については、平和構築の過程で重要な課題であると考えられているが、現実には先行研究例がほとんどない領域である。

言語の問題を調査するには民族との関連を第一に取り扱う必要があると思われる。ボスニア・ヘルツェゴビナの民族は、ムスリム人と呼ぶイスラム教徒²¹（45%）、セ

²¹オスマントルコの時代に改宗したバルカン半島のスラブ民族が、社会主義の時代を経て受け継いでいることもあり、中東のイスラム教徒とは異なり、文化的慣習の色は濃い宗教的な厳格さは比較的少ない。

ルビア教徒であるセルビア人(30%), カトリック教徒であるクロアチア人(20%), その他少数であるがプロテスタントやその他の少数民族(5%)で構成されている。紛争以前からも共通言語は、「ボスニア語」であるが、紛争前は、「セルボ・クロアチア語」と呼ばれていた。現在では、セルビア語とクロアチア語はそれぞれ別の言語として位置づけられている。一般に民族と言語が対になるコソボにおける民族とは異なり²²、ボスニア・ヘルツェゴビナの3つの主たる民族はバルカン半島のスラブ系同族民族であるため、民族の違いは宗教的な背景によるものの影響が強い。山内(2003)の説明にあるように、「セルボ=クロアチア語を話すイスラム教徒」がムスリム人。「セルボ=クロアチア語を話すカトリック教徒」がクロアチア人。「セルボ=クロアチア語を話すセルビア正教徒」がセルビア人と定義すると理解しやすい。

これらの三つの民族を含め、ボスニア・ヘルツェゴビナに住む民族を総称して一般的には「ボスニア人」と呼び、その共通言語であったセルボ・クロアチア語は、「ボスニア語」という新たな言語名として紛争後公式に用いられているのである。実際に「ボスニア語」(Bosnian language)が国際的に認知されたのは、ボスニア戦争を終結させた Dayton 協定以降である。また、この言語と民族の名称には、民族のアイデンティティを強調することを願っている、または民族の本国を意識していると解釈する傾向もある。そのためボスニア語、セルビア語、クロアチア語とあえて区別する呼び方も事行われている。特に「ボスニア人」「ボスニア語」の名称が意味する背景は、これらの呼び名が、現在自らの本国²³というべき国をもたないムスリム人たちが自分たちの統一した国を表す民族と言語のため、意識的に使ってきたとも考えられている。しかし言語間の実際の違いに関しては、方言程度での違いでしかなく、お互いに十分理解ができる言語である。標記に関しては、セルビア語だけがキリル文字を使用しているという違いがある。

2. Dayton 協定とボスニア・ヘルツェゴビナ

現在のボスニア・ヘルツェゴビナ社会を理解するために、10年前(1995年11月21日)に、米国オハイオ州 Dayton において、3年間続いた紛争を終結させた Dayton 合意に伴う経緯は不可欠な情報である。ムスリム人、セルビア人、クロアチア人

²²コソボ自治州では、セルビア人はセルビア語、アルバニア人はアルバニア語を母語としている。公用語は現在2つだが、紛争以前はセルビア人の数が少ないにもかかわらず、セルビア語が公用語とされていた。この2つの言語は言語体系が異なる。

²³山内(2003)によると、ボスニア王国(1463年)、ヘルツェゴビナ公国(1483年)がオスマン帝国によって征服されたことが、ボスニアのムスリムの民族的起源である。

の代表により3週間の協議期間を経て3民族の和解が成立し、この合意により、ムスリム・クロアチア人中心の「ボスニア・ヘルツェゴビナ連邦 (FD)」とセルビア人中心の「スルプスカ共和国 (RS)」の二つの地域を持つ国家が成立した。しかし、必ずしもこの両地域が一体になっていないことは、筆者が05年の夏サラエボ訪問時にバスターミナルがそれぞれに存在し、両地域への乗り入れをしていない状況から察する事ができた。一方で、10年間の平和が維持できたことの意味も含め、2005年の7月スレブレニツァの虐殺10周年追悼記念式典が行われた。このことはメディアでも多く取りあげられているが、スレブレニツァで行われた殺戮は、セルビア人によるムスリム人に対する「民族浄化」の究極であり、第二次大戦後の欧州における民族紛争の中で最も残酷だと言われる。しかしこの事件がきっかけとなり、NA TOの空爆が始まりセルビアを終戦に追い込んだことは歴史上重要な過程である。

スレブレニツァから追い出されたムスリム人は、女性と子供は避難民施設での生活を強いられ、男性は年齢を問わずバッテリー工場を利用した収容所へ移送、そして殺され、山へ逃げて殺された人も含めると、その犠牲者数は、わずか1週間で8000人近くにのぼる。10年の歳月を経ても、まだ身元が確認されない遺体、行方不明の家族は数限りない。戦争の生々しい傷は今日でも残されたままで、スレブレニツァを知る多くの在ボスニア・ヘルツェゴビナの外国人も、「墓場のようなところ」と形容される地での生活で大きな心理的苦痛を共有している。

難民として外国へ移住をした人たちも、家族がボスニアに残っている人たちは少しずつ帰還をしている。紛争前のボスニア・ヘルツェゴビナの人口は、約440万人である。そのうち戦争中に故郷の町や村を追われたのは約220万人、その中で国外へ難民として出たのは約120万人である。筆者が05年夏宿に使ったスレブレニツァの家の息子は、米国での永住権を手に入れ10年ぶりに親との再会のために帰国したところであった。アメリカなまりの流暢な英語が印象的であったが、一番標的になる年齢の青年がどのようにして助かったのかをたずねると、裸足で裏山に走り、国連軍のいるツヅラまで100キロ以上の山道を逃げ、その後難民としてクロアチア経由で国外にでる機会があったことを語ってくれた。しかし一緒に逃げた兄は行方が分からないままであると言った。

3. ボスニア・ヘルツェゴビナの言語と政策における課題

実質上、FDとSRの二つの国が存在する国家体制では、「均質な国民国家」(多木1999)を形成するのは困難であると考えられる。しかしEUへの加盟が実現するために、

まず国際社会に受け入れられるプロセスとして、複合民族国家でありながら均質な国民国家体制作りは不可避である。つまり、「ボスニア人」が「ボスニア語」を話す国家として国際的にも認知され、それぞれの民族中心主義を教育の現場で優先するのではなく、別々の民族と言語が融合して新たな一つの民族と言語文化圏を作り出すことが求められている。ある意味で、Internationalization から Globalization への転換が迫られていると説明できるのではないか。異なる民族、文化圏の国を繋いでいく「国際化」の意味から、グローバル（地球）を意味することで、融合され、統一されたイメージの社会を目指している。このためには、共通言語としてのボスニア語があることは大きなメリットである。統一言語を持つ事で、メディアと教育における言語に関しては一致が保たれるために同じ情報を共有することが容易である。これは、アメリカ合衆国での英語が、他言語の背景を持つ移民たちに受け入れられる共通語となり「アメリカ語」として、英語の本国イギリスとは異なるという概念を形成していくことで新たなアイデンティティを確立していることに、類似している部分があると思われる。言い換えれば、セルビア語とクロアチア語とは異なる概念を持つ新たな言語としてのボスニア語が存在する。

故に、ボスニア・ヘルツェゴビナの言語政策と教育は、コソボ自治州の現状²⁴とは大きく異なり、ボスニア語を共通語として比較的容易にすすめることが可能である。しかし二つの国体制ではそれぞれの民族主義が強くなることも否めない。その場合、教育言語として外国語の導入を促進することで対立構造を緩和できないかと考える。特定の外国語を頻繁に使用することにより、物事に対する価値観が微妙に変化し、おのずから興味が自国に向くのではなく、外国という共通の対象へ向けていくことが可能であるからである。すなわち新たな外国語をスパイスとする Globalization としての「国際化」をボスニアという国内で促進することである。これは紛争直後の、民族的対立が激しかったコソボにおいても、アルバニア系とセルビア系が自然発生的な知恵として、お互いの中で英語を共通言語としてコミュニケーションを行ったと言われる。まさに民族間の言語バリアーを克服する知恵だった。またEU諸国が自然発生的に英語を基盤にコミュニケーションをとるようになったが、そのプロセスで新しい独自の文化を生み出している。国際的競争力を強化するにも、ボスニア・ヘルツェゴビナにおいては、特に教育の場では英語の第二言語化を試みる価値はあると思われる。

²⁴アルバニア系住民が多数を占めるコソボ自治州（セルビア・モンテネグロ）においては、アルバニア語を公用語、すなわち第1言語と望む体制が強く、少数派であるセルビア語住民のセルビア人たちに不満がくすぶっている。

まとめ

アメリカ社会が、古くはMelting Potと形容され、多様な価値観を融合して独特のアメリカ文化が出来上がっていると説明されることがあったが、今日では、Salad Bowlが正しい形容だとされる。それは多様な価値観が形を残し現存する（目に見える）社会とされていることを意味している。地球規模でも、理想を求めれば、すべての良い価値観を融合させてひとつの価値観でまとめることができれば平和な世界を実現できるのかもしれない。しかし、多種多様に異なる価値観が存在し、それを調整していきながら存続している社会、Salada Bowl社会が現実である。それゆえ、ボスニア・ヘルツェゴビナが目指す真のGlobalization「国際化」は、完全な融合社会ではなく、ひとつの共通言語でまとまりながら、多民族、多文化、多宗教が共存しながら成立できる理想的な複合民族国家ではないだろうか。サラエボ市内には、紛争以前から数十メートル内に、モスク、カトリック教会、セルビア教会、シナゴグが共存する地域もあったことから、多民族共存路線を維持できる複合民族モデル国家になる可能性が、歴史的にも秘められている稀少な国家であると言える。

参考文献

- 天城桜路(2005) ボスニア・ヘルツェゴビナ／セルビア・モンテネグロ
Gorlach M.(Ed)(2002) “English in Europe,” Oxford University Press
Greenburg, R. D (2004) “Language and Identity in the Balkans,”
Oxford University Press
Ignatieff, M.(2003) “Empire Lite: Nation-Building in Bosnia, Kosovo and
Afghanistan,” Vintage.
多谷千香子 (2005) 「『民族浄化』を裁く：旧ユーゴ戦犯法廷の現場から」
多木浩二 (1999) 「戦争論」岩波新書
山内昌之(2003) 「民族と国家：イスラム史の視角から」岩波新書
Wright S.(2004) “Language Policy and Language Planning: From
Nationalization to Globalization,” Palgrave